

静坐の友

謹賀新年 全国静坐同人

静坐



昭和 2 年 3 月 5 日発行 月刊機関誌「静坐」創刊号の表紙
(題字は岡田虎二郎先生揮毫)

季刊 62 号

静坐の友社

編集発行人 松端孝元

〒五九六—〇〇〇二

大阪府岸和田市吉井町一—二〇—四

FT AE XL 〇七二—四四四—五九七五

携 帯 〇九〇—三六二九—二二五〇

静坐の友第六十二号

発行にあたって

事務局 松端 孝元



新年あけましておめでとうございます。坐友の皆様におかれましては、すがすがしい新年をお迎えることとお慶び申し上げます。

さて、「静坐の友」発刊も松下豊子先生の後を受け継ぎ進めてまいりましたが松下先生の時から数えて六十二号の発刊となります。人間に例えれば還暦を過ぎたこととなりますので、この際、機関誌「静坐」発刊当時を振り返ってみたいものと考えておりましたところ、丁度、京都の大野雄亮先生から「今までの静坐誌をコピーしたUSBが手に入ったので送ります。」と言って、貴重なUSBを送ってきて頂けました。創刊当時の静坐誌は見たことがなかったものですから、これは天の救けだと思ひ、うれしく、震えながらUSBを開いてみました。

それによると、小林信子先生がご主人の参三郎先生御逝去の大正十五年、悲しみの癒えぬ中、参三郎先生の遺志を継ぎ、静坐社を設立すると同時に

月刊「静坐」誌の編集、発刊を始められていることが分かりました。

私自身、静坐をはじめてまだ三十数年にかたまりませんので当然、小林信子先生に会ったこともなければご指導を受けたこともありません。

しかし、このUSBを開いていけば、きっと創刊当時の信子先生を初め、当時の指導者の先生方に会えるかと思うと本当にドキドキ、ワクワクでした。

私は、静坐を始めて、しばらくしてから会場であった岸和田市の公民館に指導に来られた小林みどり先生のご指導を受けました。その時のみどり先生の丹田の力にびっくりさせられ、それから真剣に静坐に取り組み始めました。その後、実習会にも参加し、大阪静坐会にも寄せ

ていただくこととなり、小松先生や松下先生のご指導を受けるようになりましたので私にとって小林信子先生は、雲の上のさらにその上の伝説の人でした。

その先生の生の資料に目を通せることになったのですから、うれしくて、うれしくて小躍りいたしました。このうれしさを何と表現したらいいのか、分かりません。大野先生には本当に満腔の敬意と感謝をささげるものです。

岡田先生亡き後、更に小林参三郎先生をも失った信子先生が失意の中、静坐社を立ち上げられ、月刊「静坐」誌を発刊されたのは昭和

二年のことです。静坐に全生活をささげられ、実践され、今日の隆盛をみるまでになったご苦労には、いくら感謝してもきれいなものはございません。昭和二年生まれの人は今年百歳になります。昭和六年は満州事変の勃発の年です。そんな混乱の時代から今日まで受け継がれて来た揺るぎない静坐の基盤が造られたのは、紛れもなく信子先生のお陰だと思えます。当然、当時のことを知る人は誰もいません。ただ、ただ感謝と共に、往時を忍びながら、与えられた資料を紐解き、今日の我々に課せられた使命は何なのかをしつかり感得し、先人達の活動に恥じないよう努める覚悟につながりたいと思うのです。

信子先生の渾身のご努力により、昭和二年三月、三十四頁建て月刊誌として発刊された静坐誌も財政的理由などから一時中断された時期もありましたが、昭和二十八年五月から四頁建ての月刊誌となり、昭和三十六年の第三〇三号まで続けられています。その後、昭和三十七年四月から年四回発刊の季刊「静坐」誌として続けられ、更に編集者の交代などにより「静坐の友」に引き継がれ、今日まで続けられてきています。

かつて小松幸蔵先生が、静坐社創立六十周年記念誌「静坐の道」の中で「小林信子先生の願」と題する文章を載せられております。

信子先生の並々ならぬお覚悟を知る手がかりとして、坐友の誰もが知らねばならない重要なことであろうかと思えますので掲載させて頂きます。

(前略) 今回の夏期実習会(註 昭和六十二年)は第六十回ということになります。同時に静坐社創立六十周年にあたります。

皆さんお気づきになっていないと思いますが今回の実習会が第六十回ということとは、戦中、戦後の我が国にとって最も厳しい時代にも一回の休みもなく、この静坐実習会が続いてきたということとでございませぬ。他にあまり例のないことだと私には思われます。このようなことが実現できましたのは、信子先生が岡田虎二郎先生の残された静坐の道を、正しく次の世代に伝えたいという並々ならぬ大きな願いと、願(がん)を起(おこ)され、昭和二年以来、一貫して静坐に全生活を捧げてこられたからだと思えます。(中略)

今、改めて考えますと満四十歳の一女性ご夫君の死後、その追悼のため静坐に全生活を捧げる決意をなさったということ、それをその後の五十年近い年月にわたって一度の挫折もなく一筋にやり通されたということは何とも言いようのない大事業だと思います。静坐と仏教によって磨かれた智恵の力の他に先生の生まれながらの非凡な才能なしにはできなかったことだと思えます。(後略)



以下、「静坐」創刊号から何点か記事を拾い上げ、紹介します。
第一ページには囲み記事で次の二つの記事が載せられていました。

今回私共同志相集まりて「静坐」という雑誌を発刊し、聊か保健と宗教芸術等との関係について考究し体験していきたいと存じます。

静坐法は、故岡田先生の創建に係り、次いで故済世病院長小林ドクトルは進んでその得意とする所の医術の上から発明せらるるところ多く、それが如何に多くの同胞を裨益せられたかは、その著「生命の神秘」「自然の名医」が明らかに報告する所であります。

私共は此度故ドクトルの追悼の一事業としてこの雑誌を発行し、続いて各地に於ける同志の方々との連絡を取りたいという念願に燃えているものであります。

どうぞこの趣意にご賛同の方々には私共の為に一臂の力を添えたまわんことをお願いする次第であります。

一、執筆者（いろは順）

蜂屋賢喜代 橋本五作 金子大栄 成瀬無極 倉田百三 山辺習学 二荒芳徳

足利浄圓 木村 毅

二、編纂者 小林 信子

三、「静坐」刊行賛助規定 一時金一口五円（向こう二三年間雑誌を進呈すること）

発起人 蜂屋賢喜代 田坂養吉 成瀬無極 山辺習学

山口 栞 二荒芳徳 足利浄圓 清滝智龍

丹田は生命の宮殿

丹田を養うには常に姿勢を正しくせねばならぬ。凡そ地上に立つて居るものは、悉く物理の法則に従わねばならぬ。例えば草木にしても真直ぐに立つて居るものは自然と同化して段々成長します。少しでも曲がっているものは充分に成長することができないのである。

人間もこれと同じことで姿勢が正しくない人は不自然であるから、自然に征服されてしまいます。それ故に人は立っていても腰かけていても坐っている時でも常に姿勢を正しくせねばなりません。

日本人は姿勢が非常に悪い。特に泰西文明の輸入以来、内外の刺激が烈しくなり脳を使うことが多くなって、それでも丹田が皆空虚になってしまっている。このときにあたってその必要にせまられて生まれ出たのが即ち静坐法であります。（「生命の神秘」より）

静坐創刊号に載せられている

小林信子先生の編集後記

この度皆様のご賛助のもとに「静坐」が発刊せられ私がその編集をさせていたたくことになりました。それは今後どんなにか私を育て導いていただきます事でございます。本当にありがたいことでございます。

そして皆様には毎月々々先生方の尊いご体験やご研究をお知らせすることができ、又、道と同じうせらるる皆様方と御親しく願えるようになりますのは真にうれしいことでございます。

「丹田の充実を計り各自の王国の莊嚴にいそしみましょう」って、いつかのお年始に申し上げました小林の言葉そのまま、皆様とご一緒に精一杯生かしていただきとうございます。

発刊に際して尊い師友の方々から陰に陽に身にあまるご厚意を忝うして真にありがたく感謝の涙にむせんでおります。どうかこの雑誌は今後の私の大切な仕事として感謝と期待とをもって懸命にやらせて頂きたいと念じております。

表紙の題字は岡田先生のご真筆で、豊橋の伊藤卯一様のご秘蔵のものでございます。同氏のご厚意によりここに頂戴することができまして真に光榮に存じます。装丁の童子は法隆寺の五重塔にありますもので岡田先生が殊の外、

ご珍重になったものでございます。本紙のページ数は三十二と決めました。来月は蜂屋先生、金子先生、それから木村毅様にお願ひ申し上げまして、ご原稿を頂戴いたしたいと存じております。どうぞ楽しみにお待ちしております。それから読者の方々からも各地の静坐会のご通信やご感想を頂ければお互いに励まされることが多いことと存じますからよろしく願ひます。

こちらでは、小林について坐っていらつしやった方々によって足利先生を中心にしたよゐ会が生まれました。十二月の二十一日から始まり毎週火土の夜、足利先生は人一倍お忙しいお身体なのでございますのに、いつもご出席あそばしお導き頂いております。そして桜井安次郎様、安蔵様、篠村善次郎様、金井浩様、泰知夫様などによって何から何まで行き届いたお世話をあそばしていただいております。そのため、皆様も大変に心持よく御熱心にお坐りになっております。

この夏は橋本五作先生に願つて、この会にご出席いただきたいと存じまして今ご承諾を願ひ中でございます。

限りある紙面なのでまた追々にご報道申し上げますこと致します。



解説記事の最初は橋本五作先生の記事です。それから、一荒、倉田、山辺、成瀬、足利先生の記事へと続いています。ここでは紙面の都合上、橋本先生の記事だけ紹介させていただきます。少し長くなりますが全文掲載させていただきます。

地下行水の静坐道

橋本 五作

岡田先生登仙後既に六年有半、其の後更に東京の大震災。静坐で有名な日暮里の本行寺も潰れ、又、その静坐会も潰れた。従つて、天下の静坐会が全部潰れたように考えている人もある。新聞に静坐の事が書いてなければ国中に静坐勤行者が無くなったように信じている人もある。新聞の広告が仰山だと盛大なように考えるから、此軽薄な人情を利用して金儲けする人もあり、世は宣伝の競争となる。世人は益々これに釣られて、これに加入し、これをかうということになる。お陰で巨万の富を得た薬屋もあれば天下を風靡する雑誌屋もできる。

新聞広告を大にして、入門料参拾円或いは五拾円を収め、香具師的余興に依つて人目を眩惑し、三日ないし一週間の講習で万事を卒業させ、転々地を変えて歩く心身改造師が中々に繁盛し、新奇々と選んで看板を掲げる治療術は至る処に相応な人気を集めている。而もこのごとき世態が果たして間違いない。

きや否やを考察する余裕すら無き人多数を占めるに至つては驚かざるを得ない。我静坐道はその性質上、地下行水の態を取るものである。

年間に教えを受けたもの既に幾萬、各自己が丹田中に滔々として尽きざる泉を見出せる門人元より幾千、自ら銘々地下行水の流れに貢献しているのである。その水は人目を避けて四方に流れ随所泉を湛えて渴するものを癒し、時に「オアシス」を養いて旅人の来たり汲むに任せて居る態である。自分はしばらく僻阪の地にあり内地の旅行に不便の境にあれども、自ら目に映り耳に入れる消息又幸に少なくはない。嘗て和歌山市在任の実業家、何不由なき身分なるに結婚以来約十年に近く、大切なる子宝も無きに淋しく思い医師の診察を受けられたところが夫人の胎内に故障があつて手術を受けなければその見込み無しと言われ躊躇されておられたが、静坐をはじめて数か月にして妊娠され、遂に健全なる男児をあげられた。而し其児の生まれるや両手を開いて生まれたと言つて喜びの報知が舞い込んだこともあれば、四、五年前まで頭髪が白い方が多かつたが、静坐のお陰でこんなに黒くなつたと言つて私の前に出られた人も福岡県にあつた。又、肺結核も第三期頃まで進んで村の人々は、どうせ近いうちに葬式の手伝いかとまで覚悟しておつたのに、本人は全く斯道の力によつて救われ健康は再び一人前となり、

其の後十年、今以て銀行員となつて働いてる人も長野県にある。

病弱な人が健康を恢復した喜びの手紙の如きは数えるにいとまがないが、感極まつたであろう私如きものを神様呼ばわりされた人も二、三人は記憶している。誠に勿体ないことである。脂肪太りで困り抜いて居った夫人、両乳は重くて之を革具で釣り、胴には「コルセット」をはめ、大した仰山な武装だが、それでも十分間と静坐し得なかつたのが半年ほどの静坐敢行で乳釣りの革具も「コルセット」も全く不要に帰し、誠に格好のよい姿になられた夫人も現に久留米におられる。静坐の力は誠に偉いもの、自分でお世話をして自分で驚かされる事すら珍しくない。

嘗て山梨県の監獄（今は刑務所となつたが）の未決監に収監されていた某、細君が面会に来た折頼んで差入れさせたのが「静坐の力」、それからその人が未決監におる間、暇なので一日八時間程宛静坐を専門にやった。その進歩も又著しいもので体重の増加は元より、未だ刑の宣告も受けない内に厚く先非を悔い、出獄後は堅く公明なる職業に就いて渡世すべき覚悟を述べて居られた。「聖人の道を悪用して災この身に及んだ」とあつたから売卜でも渡世としておられたらしい。こうなつてくれれば裁判官も骨が折れず、再犯三犯者という者も無くなる訳である。「君子部屋に居て言うこと善なれば千里の外、之に応ず」などと言う句

は「易」にあるということだが、私はこの人から教わつて今以て記憶している。

我等の地下行水は至る処に泉となつて湧く。最近に頂いた佐藤文一氏の書信にもこういう文があつた。

先生！愈々時が来ました。厚生の朝は恵まれました。口で言うても解らぬ境地です。一切のものが一時に輝き出しました。高山のお花畑のようです。

曹洞宗の安心も親鸞聖人の信仰も、キリスト教の信仰もみな一度に頂かされました。誰に何とお礼を申し上げたらよいのでしょうか。

広告に圧倒的氣勢を挙げずとも、方法に眩惑的新奇が欠けていても地下行水の力は偉大なものである。九州久留米少年刑務所は十六、七歳から二十六、七歳まで四百幾十の受刑者を収容しているが、昨年一月から静坐を課業として全部に課してある。最も此処まで行くには中々の準備があつた訳であるが、まずこの刑務所の保険技師の山口医師は十五六年来の静坐勤行者であり、現に久留米静坐会の指導者である。戸田刑務所長は嘗て東京在住中数年修行されたが要領に多少の間違いあつて予期した効果を得られなかつたが、久留米に転任後此の地の静坐会に加入されて要領を変えて再び始められてから、メキメキ上達が見えてきた。それに教誨師柳原氏が夙に此の地静坐会の同人であるという訳で現在では刑務

所の幹部、所長以下六、七人も同人である。

ところが四百の受刑者としては実施後いまだわずかに一年。四百余人といえば、中にはこの施設を心中、余り感心しないものもあるだろうに、その大勢における影響は実に驚くべきものである。斯のごとき団体に実施して見ると、現代人の最も好む統計上の数字にその効果を現すこともできる。最近私の手許に頂いた柳原教誨師の通信があるのでそれをそのままご紹介することにします。

柳原教誨師の手紙

久留米少年刑務所通信



橋本先生、只今戸田所長より「直接教化の任にある君よりお答えせよ」との内命により、御疎情のお詫びに代え、吾が久留米少年刑務所受刑者に対する静坐の力の反響を御報道致します。

先生、御承知の通り当受刑者の教化方針としては、宗教的、倫理的教化に由りて、荒みたる彼等の感情を陶冶し、職業の教育を施して勤労の風を訓致せしめ、規律ある訓練によりて良習慣を養成し、体育を奨励して体力の増進を計り、而してこれらの一大根元を丹田に樹立すべく静坐を修行せしむることにしております。

先生、この静坐の実行は本年一月からでありまして、未だ十一月に過ぎませんが、私共

とは違い、少年時代だけあって進歩も速やかにして、従って力の現れに於いて顕著なる事は驚嘆の外ありません。

申すまでもなく彼等不良少年の欠陥として心散漫にして物事に倦み易く、浮浪生活好みて落着きなく、懶情にして勤勞の風乏しく、短気にして作業に対する嗟嘆、処遇に対する不平、或いは釈放日の遅きに悲觀して全く煩悶懊悩中に呻吟し、一喜一憂の中に生活する彼等若者を觀ては、たとえ罪の人とは言え真に同情に堪えぬ次第であります。

先生、境は氣を移し、氣は境を移すとか、彼らが自業自得、この奈落のどん底も彼等静坐の努力に依りて心氣、転換し、漸次天国に変化しつつあるではありませんか。即ち昨年十一月間所内に於いて犯則行為によりて懲罰を受けし数が五百四十四件でありましたが、本年は十一月までに僅かに二十九件に減じ、しかもこの頃は絶無と言つて過言ではありません。如何に温良忝謙勤勉忠実の美しき天使と化しつつあるかを証拠立てましょう。

それに賞表褒状等を受ける者は昨年十一月間十名なりに比し、本年十一月間に十六名に達しているではありませんか。何卒精進している彼等の甦りつつある愛らしき純心を賛美して下さい。

先生、勿論肉體上の変化も同様です。K生の如きは既に道の師山口保健技師よりご通知があつたことと存じますが、胃拡張で瀕死の状

態に陥り、やつれたる身体、蒼蒼たる顔色はもはや救われぬ者と断念しておりましたが、如何です。全く静坐の力により、この頃は肉付き、顔色黒々として元氣よく、感謝平和の中にセッセと糸繰作業に専念従事しているではありませんか。二、三日前にD生が郷里の父への通信書に「静坐のお陰で私のどもり(吃音のこと)も治りました。」と認めてあります。なるほど彼は、入所当時の本年三月にはほとんど吃音甚だしく言語不通というも過言でないほどでありましたが、わずか九ヶ月の努力修行によりて、談話にさほど困難を感じぬ程度にまで矯正されております。今日も職員同僚と今更静坐の力の偉大さ驚嘆したような次第です。

先生、御存じのかの当所の黒い重々しい嫌な鉄門は、この頃白ペンキで全部塗り替へられつつあることを何卒お喜び下さい。

明年の事を言えば鬼が笑いますが、先生の明年御来所の際には麗しく浄化されし彼等をご覧に入れることを所長はじめ私共の楽しみの一つとしてお待ちしております。いる次第であります。

合掌

(大正十五年十二月十日稿)



昭和三十七年四月から「静坐」誌は、年四回発行の季刊誌となっておりますが、その後三百三号まで続けられています。ここでは、その第一号の記述内容を見てみます。

季刊「静坐」の発行



季刊発行について 報告とお願い

静坐誌が赤字のため休刊になりました。

小林先生おひとりのご悲願の上にあぐらをかいて、その恩恵に甘え、よりすぎるだけのこととしていたような我が身に、いまさら鉄槌を下された思いであります。と申しましたも私共が先生の後を受け継いでこれを背負つて立つには、その力量のあまりに乏しきを嘆かざるをえません。誌友、先輩のご意見を伺い、よりよりに相談して、次のような方式をまとめました。ご賛同ご支援を仰ぎたく存じます。

なお、引き続き皆様の熱意あるご検討を煩わし、改善発展の道が開けますよう切にお願い申し上げます。

記

一、経理

(イ) 本誌刊行のため会計部を設け担当者を決める

(ロ) 年間誌代を五百円とし、正会員とする。

季刊静坐第一号の記事

「勉強」の意義

柴田 徹士



- (ハ) 誌代二口担当者を A 賛助会員
三口以上を B 賛助会員とする。
- (ニ) 会員の住所氏名を誌上に載せ、相互の交
流・親睦に役立つようにする。
- (ホ) 年一回経理の状況を報告する。
- (ヘ) 会員の増加につとめ、内容の充実を図
る。
- (ト) 会計担当者は当分左の者があたる。
下条源一 藤井節雄 岸 駿

二、刊行方式

- (イ) 季刊 当分従前の形で、四、七、十、
一月の発行とする。
- (ロ) 右以外の月はハガキ通信を送る。
- (ハ) 発行所、発行者は従前の名義を続ける。

三、編集

- (イ) 編集部を作り、担当者を決め相談して
まとめる。
- (ロ) 広く会員の声を収録する。
- (ハ) 編集部員は、編集についての企画と事務
に責任を持つが、静坐そのものに関する
記事は、すべて小林先生のご指導、校
閲を受ける。
- (ニ) 編集部員は当分次の者があたる。
西元宗助 (京都府立大学教授)
小松幸蔵 (大阪府立大学教授)
柴田徹士 (大阪大学助教授)
曾我了雲 (神戸産業技術学院教授)

「語録」の中に、難行苦行、禁欲、克己な
どやせ我慢的な努力を戒める言葉が多くあり
ます。静坐はそういうものであつてはならな
いのです。それなのに「勉強」しなければな
りません。(六十一頁) という矛盾した説がは
いつています。どういう訳でしょうか。

誰でも静坐を始めたころは難行苦行とい
う感じが伴います。しかし、少し慣れれば大
なり小なりその感じは消えていきます。その
時に「勉強」が必要になります。「勉強」とは、
やせ我慢的な努力ではなく、安楽の法門を突
き進んでいく努力であります。

人間の心は氷山のようなものであつて、水
面の上に出ている部分が意識であります。
我々は「努力」する時は、その海面上の部分
を押し突いたり突いたりして動かそうとします。
それが「やせ我慢」です。でも水面下の部分、
すなわち心の大部分はそれでは動きません。
禁欲、克己などの努力がむなしなのはそのた
めであります。岡田先生のお言葉は、そのよ
うな努力に苦しんでいる者たちに同情して発
せられたものと思います。

小林ドクトルは、更に科学的に、しかも初
学者にもわかるように図を入れて「ホビア」

下にある心を動かすことの困難さとその部分
を動かす要領を教えられた貴重な説明です。静
坐の門に入れば、その水面下にある無意識の部
分を動かす方法が会得されます。方法さえ会得
できれば、もうそれは難行苦行や禁欲ではな
い。暗中模索の苦しさ、不安はありません。「悟
った」訳です。ただし悟っただけで終われば野
狐禅になります。静坐が悟後の修養であるとい
うのは、それを言ったものであります。

静坐の姿勢に少しなじめば、程度の差はあ
つても、必ず身心のくつろぎ、平和が得られま
す。それに安住し、停止しないでほんとうに生
命力を燃焼させながら、「三百六十五日、一瞬
たりとも力が抜けていない」(語録五十六頁)
ように努めること。それが生きるといふことで
あり、「勉強」することである、と私は解釈し
ています。どなたかのご参考にでもなればと、
自己流の反省と自戒を兼ねて、感想を述べまし
た。
(阪大助教授)



編集後記

大野雄亮先生から頂いたUSBにより私は大いなる勇氣と刺激を受けました。そして何としてもこの静坐を続けていかねばならないという覚悟ができました。

小林信子先生の偉大さは、小松先生の手記により、分かっておりましたが、昭和二年三月五日発行の創刊号「静坐」誌の信子先生の編集後記を見て、信子先生の偉大さにうたれ涙を禁じえませんでした。

編集後記の全文は一頁二頁に載せさせて頂いている通りですがその中で特に胸を打たれましたのは次に下りです。

◎この度、皆様のご賛同のもとに「静坐」誌が発刊せられ、私とその編纂をさせていただくことになりました。それは今後どんなにか私を育て、導いていただくことでございましょう。本当にありがたいこととございます。

◎そして、皆様に毎月々々先生方の尊いご体験やご研究をお知らせすることができ、また、道と同じうせらるる皆様方と御親しく願えるようになりましますのは眞に嬉しいこととございます。

◎「丹田の充実を計り、各自の王国の莊嚴にいそしみましょう」って、いつかのお年始に

申し上げました小林の言葉そのまま、皆様とご一緒に生かしていただきとうございます。

◎発刊に際して尊い師友の方々から陰に陽に身にあまるご厚意を忝うして眞に有難く感謝の涙にむせんでおります。どうかこの雑誌は今後の私の大切な仕事として感謝と期待とをもって懸命にやらせていただきたくと念じております。



私はこの文章で信子先生が皆様の尊敬を一身に集め、慕われていた理由を知りました。

そして、今日まで続けられてきたエネルギーを感じました。信子先生は、岡田先生と同じレベルでこの静坐の神髄を掴まれているのだと思います。だからこそ、この火を絶やすことのないよう、自己のすべてを打ち捨て、静坐に全精力を注ぎ込めたのだと思います。この編集作業に従事することは未完の自分自身を鍛えてくれることになるありがたい作業だと認識している謙虚な心根だったと思います。だからこそ、大方の人々から信頼され、ご協力を取り付けられたのだと思います。

驚くべきことは、それが四十歳という一人の女性の覚悟であったということです。

私は、間違いなく「静坐」こそは、人間が踏み行わねばならない

絶対的な道だと確信を抱かされました。



原稿募集のお願い

松下先生が編集されていた静坐の友には

「生命合奏」というコーナーがありました。そこには皆様からの投稿記事が掲載されました。昭和二年に発行された「静坐」の創刊号にもあり、このコーナーは各地の静坐道人の交流の場になっていったようです。

今月号から復活させますのでどうかこの記事をお読みなつた誌友の皆様は、奮って各地の活動の様子をお知らせください。

又、各先生方のご体験やご研究の成果もお知らせいただきたいと思ひます。

適宜発表させていただき、誌友の皆様のご参考に呈してまいりたいと思ひます。

どうかよろしくお願ひ申し上げます。

(事務局 松端孝元)

原稿
募集

